

デジタル画像が語る「探偵小説一代男」の創作現場

——「オンライン版 二松学舎大学所蔵 横溝正史旧蔵資料」 解題

二松学舎大学教授 山口 直孝

1. 横溝正史旧蔵資料の概要

「オンライン版 二松学舎大学所蔵 横溝正史旧蔵資料」は、その名の通り、二松学舎大学（以下「二松」と略記）が所蔵する横溝正史旧蔵資料のうち、自筆草稿、原稿類総数483点（約14,000枚）をデジタル化したものである。ほかに、単行本や雑誌の切り抜きのうち、正史の手が入ったもの30点、『悪霊島』創作に関わるノート2冊、映像関連資料のうち、正史の書き入れが見られる『蝶々殺人事件』、『蝶々失踪事件』のシナリオ2冊を加えている。本オンライン版によって、書き出しに悩み、また改稿を重ねていく正史の創作過程をよりつぶさに、また幅広くとらえることが可能になった。

横溝正史の旧蔵資料のうち、探偵小説関連の図書や雑誌、正史宛書簡、一部の草稿や原稿類は、1995年の開館特別展示「横溝正史と『新青年』の作家たち」を機に、孝子夫人、長男亮一氏から世田谷文学館に寄贈されている。二松の資料は、それ以降に見つかったものやご家族が保管されていたものを引き受けたものである。きっかけは、亮一氏が成城の自宅物置から大量の草稿・原稿類が収められたダンボール箱を発見されたことである。古書店を通じてまとまった受け入れ機関を探されていたところ、縁あって二松が名をのり上げることができた。購入した資料の粗整理が終わり、記者会見を開いたのは、2007年11月20日のことである。『犬神家の一族』の草稿や未発表作『霧の夜の出来事』（その後の調査で、翻訳であることが判明）を始めとする資料の発見は、テレビや新聞で報道され、大きな注目を集めた。

さらに2008年には、第一回日本探偵作家クラブ長篇賞賞状や『悪霊島』取材ノートなど18点の資料を、2011年には『空蟬乙女』の原稿や「真説金田一耕助」の草稿を追加で購入した。また、2012年3月には、亮一氏から『迷路荘の惨劇』・『病院坂の首縊りの家』・『悪霊島』・『上海氏の蒐集品』・「楽しかりし桜の日々」の製本化された原稿の寄贈を、2019年には次女の野本瑠美氏から写真・アルバム類の寄贈を受けた。2021年冬には正史が所有し、毎夏を過ごした軽井沢の別荘に残されていた『仮面舞踏会』ほかの草稿を始めとする資料を瑠美氏からご寄贈いただいた。ご家族のご理解、ご協力の下でより充実したものとなり、二松の横溝正史旧蔵資料は世田谷文学館と並ぶ一大コレクションとなっている。

資料の概要を種類別に示すと、Ⅰ原稿・草稿・ノートなどの自筆資料（約500点）、Ⅱ雑誌・新聞切り抜き（約370点）、Ⅲ洋雑誌（約290冊）、Ⅳ洋書（約170冊）、Ⅴ和書（約2000冊）、Ⅵ写真・アルバム（約800点）、Ⅶ横溝正史宛書簡（18通）、Ⅷシナリオ（約300冊）、Ⅸ映画ポスター・チラシ・ステールなど（約800点）、Ⅹ地図（19枚）、Ⅺフィルム（5巻）、Ⅻその他（賞状・筆記用具・日用品・色紙など。約160点）になる。資料の具体的な内容や意義については、『横溝正史研究』（戎光祥出版、既刊6

冊)で適宜取り上げ、二松における企画展「横溝正史旧蔵資料展」(2007年12月)、「横溝正史の世界～新収資料を中心として」(2008年6月)でも紹介してきた。「没後40周年横溝正史展」(くまもと文学・歴史館、2021年7月～9月)など他の文学館における展示にも可能な限り協力しているが、点数が膨大ゆえ、全容を示すにはまだ至っていない。

2. オンライン版の収録内容と特徴

今回のオンライン版は、最初に触れたように、自筆資料を集成したものである。草稿の一部に手紙の下書きが含まれており、プライバシーの観点からそれらは省いたが、残りはすべて収録した。草稿・原稿類は、形態によって、また、受け入れ時期によって分類、保管されているため、必ずしも執筆時期やジャンルでまとまっているわけではない。とりわけ成城の自宅物置で発見された草稿類は未整理の状態であり、いくつもの作品が混在している。長年放置されて虫食いのはなはだしいものや紙質が悪く劣化の進んでいるものもあり、扱いは慎重を要する。原資料を見渡すことは、簡単なことではない。

執筆の際、正史は下書きを作り、清書を行うことを習わしとしていた。下書きには、反故原稿の裏が用いられた。ただし、多忙な時は最初から完成原稿を仕上げる心づもりで原稿用紙が使われる。実際には、起筆の文言が定まらなかったり、ペンの走りが気に入らなかったりして、数多い書きつぶしが生み出されたのであった。草稿には、一行しか記されていないなど、断片的なものも少なくない。元々原稿用紙を大切に扱う意識があり、アジア太平洋戦争期の物資不足も手伝って、正史の草稿は、両面が使われることが普通であった。表裏で作品が異なることもしばしばである。再利用のために相当量の草稿が留め置かれ、結果として今日まで残されることになったのは、後世の者からすれば幸いであった。とはいえ、それらは複雑な様相を呈しており、容易に解きほぐせるものではない。

草稿類の整理分類作業は、探偵小説研究家浜田知明氏の協力の下、従来も進めてきたが、今回のデジタル化の機会を得て集中的な調査を行い、可能な限り作品の特定に努めた。残念ながらすべてを明らかにすることができなかったが、判別できたものについてタイトルを注記し、検索できるようにした。例えば『八つ墓村』の原稿・草稿の現物は、錯雑した状況で見つかったため、15のファイルフォルダーに分けて保管されているが、オンライン版では簡単に通覧することができる。また、表が『獄門島』、裏が『人形佐七捕物帳 狸囃子』といった草稿(資料番号2_1)も、それぞれの作品に即してたどっていくことが可能である。並び替えに手間を要さず、ある起点から複数の文脈をたどっていくことができるのは、オンライン版の大きな魅力であろう。

3. 自筆資料から浮かび上がる執筆スタイル

草稿・原稿の制作時期には偏りがあり、正史の長い創作歴のすべてを網羅しているわけではない。おおよそで言えば、①1930年代、②アジア太平洋戦争前夜から戦時下、③敗戦直後、④1950年前後、⑤1960

年代後半、⑥1970年代以降に分けられるであろうか。1933年の『幽霊騎手』の草稿が最も古く、それ以前の作品は確認できなかった。同年に正史は吉祥寺に新居を構えており、住まいが変わったことと残された資料の範囲とは関係しているかもしれない。①は、『白蠟変化』や『真珠郎』といった由利麟太郎・三津木俊助シリーズが中心であり、『鬼火』なども含まれる。②の時期は、人形佐七捕物帳シリーズを始めとする時代ものの占める割合が高くなり、『雪割草』を始めとする単発の現代小説も散見される。本格探偵小説への転身を期した③においては、『本陣殺人事件』・『獄門島』などの金田一耕助シリーズ以外にも由利・三津木シリーズの『蝶々殺人事件』・『神楽太夫』や『詰将棋』といった短編の断片が多く見られ、旺盛な創作意欲を感じさせる。④は、執筆が多忙を極めた時期であり、金田一耕助シリーズの『八つ墓村』・『犬神家の一族』、由利・三津木シリーズの『模造殺人事件』、長編『女が見ていた』、ジュブナイルの『夜行怪人』などの草稿が属する。⑤になると草稿の質に変化が見られ、金田一耕助シリーズの『首』・『香水心中』、人形佐七捕物帳シリーズの『番太郎殺し』など、ほとんどが既発表作品の加筆修正稿である。中には、単行本の切り抜きに手を入れたものが挿入される事例もある。⑥は、リバイバルブームの中で新作を再び発表するようになった時期であり、『仮面舞踏会』・『病院坂の首縊りの家』・『悪霊島』など金田一耕助シリーズの草稿・完成原稿のほかに、エッセイ類も目立つ。

正史は、複雑な人間関係や起伏に富んだストーリーも頭の中で組み立てることができる能力の持ち主である。記憶力が衰えたせいも、晩年には登場人物一覧や章立てを記した覚書が作られているが、基本的にノートやメモを必要としなかった。散歩などをしながら構想を練り、整った段階で筆を執ったという。原稿用紙に向かった時点で作品の基本線はできあがっていたと思いが、ふさわしい表現を求めて書き直しは珍しくなかった。書く時の調子も重要であったようで、わずか一行、数文字で没とされた原稿用紙が残されている。書き損じは、『犬神家の一族』や『八つ墓村』の草稿に顕著であり、①～④の時期に広く見られる。冒頭や章の始まりなど書き出しには、特に腐心した様子が見える。④においては、『犬神家の一族』の構想メモを除いて、すべて原稿用紙の表だけが使われている。再利用された形跡がないことは、この時期の忙しさを示している。⑤、⑥は、時間に追われることがなく、気持ちにも余裕が生じたのか、断片的な草稿は少ない。下書きがていねいに作られ、清書が複数回行われることもあった。時期による変化はあるものの、原稿用紙に向き合うことから創作が具体的に始まること、書き直しの作業をいとわないことは、一貫している。自筆資料から浮かび上がる執筆スタイルは、きわめて個性的と言えよう。

4. まとめにかえて

先述したように、本資料は、正史の創作活動の全体を伝えるものではない。金田一耕助シリーズ全77作中、本資料に含まれるのは、21作分である。代表的なもので言えば、『三つ首塔』、『悪魔の手毬唄』、『白と黒』などの草稿は見つかっていない。『蔵の中』や『探偵小説』は、同じ時期の他作品の草稿が残っているにもかかわらず、確認できなかった。

それでも、483点（約14,000枚）の自筆資料は膨大なものであり、まとまりとしてあることで多くのことを伝えてくれる。例えば、草稿には、未発表に終わった作品や埋もれていた作品を知る手がかりとなるものがあつた。敗戦直後に執筆されたユーモア小説の翻案『霧の夜の出来事』は、本資料によって初めて知られたものであり、長編『雪割草』は、断片的な草稿の筆跡や文言が掲載紙の発見につながつたものである。今回、新たに掌編『学徒勤労一挿話』の内容が判明し、初出誌も特定することができた。草稿には、戦時下のものと思しい未知の作品の草稿がなおあり、さらなる探索が求められる。

本資料はまた、執筆のありようがどのようなようであつたかを教えてくれる。正史は自身の創作について積極的に語る作家ではなく、舞台裏は公にされた一部の日記などからかいま見えるだけであつた。おびただしい書き損じや下書きは、何も無いところから虚構の世界を創り出すことの難しさを伝え、同時に厄介な作業に取り組み続けた精神の強さを示している。とりわけ、戦時下および1960年代という、不如意であつた二つの時代の動向を知る上で資料は貴重である。前者には探偵小説の書きにくい状況下で時代小説、現代もの、翻訳などが不連続に手がけられた事情が、後者には新作の注文が途絶えて雌伏を強いられる中で旧作の手直しや未完結作の書き継ぎに打ち込む様子が透視できる。いかなる時においても飽くことなく筆を走らせた姿勢は、「探偵小説一代男」と自らを呼んだ作家にふさわしい。簡単な操作によって丹念な検証ができるデジタル画像となつたことで、手書きの資料は、さらに多くのことを語るであろう。